

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-29

EToS : 法政大学江戸東京研究センター年度 報告書, vol.1

(出版者 / Publisher)
法政大学江戸東京研究センター

(開始ページ / Start Page)
1

(終了ページ / End Page)
32

(発行年 / Year)
2018-03-31

法政大学

ETOS

2018 vol.1

1

江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies



目次 | Index

| | |
|--|----|
| マニフェスト Manifesto | 2 |
| 江戸東京研究センターと法政大学のブランディング The Research Center for Edo-Tokyo Studies and Hosei University Branding 法政大学総長、社会学部・大学院人文科学研究科国際日本学インスティテュート教授 田中優子 President, Hosei University; Professor, Faculty of Social Sciences, Graduate School of Humanities, International Japanese Studies Institute Tanaka Yuko | 4 |
| 江戸東京研究センター設立にあたってのご挨拶 Marking the Establishment of the Research Center for Edo-Tokyo Studies 初代 江戸東京研究センター長、法政大学特任教授 陣内秀信 First Director of the Research Center for Edo-Tokyo Studies, Professor, Hosei University Jinnai Hidenobu | 6 |
| 江戸東京研究センター長就任にあたってのご挨拶 Inaugural Address as Second Director of the Research Center for Edo-Tokyo Studies 江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授 横山泰子 Second Director of the Research Center for Edo-Tokyo Studies, Professor, Hosei University Faculty of Science and Engineering Yokoyama Yasuko | 8 |
| 江戸東京研究センター(EToS)とは About EToS | 10 |
| 4つの研究プロジェクト 4 Research Projects | |
| ① 水都—基層構造 Water City: its Founding Structure | 14 |
| ② 江戸東京のユニークさ Edo-Tokyo's Uniqueness | 18 |
| ③ テクノロジーとアート Technology and Art | 22 |
| ④ 都市東京の近未来 Future City Laboratory Tokyo | 26 |
| 2017年度事業報告 2017 Project Reports | 30 |

表紙の図版(上から):

「天保御江戸大地図(1843年)」国立国会図書館

「国土地理院航空写真(2007年)」国土地理院

「参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量図(1884年)」の複製(一財)日本地図センター

「ソリッド・ボイド・マップ(2018年)」法政大学北山研究室製作

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature, history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally and spatially, and derives from them a method and theory for constructing sustainable global communities. It is a learning research base where that wisdom is nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of global communities.

江戸東京研究センターと法政大学のブランディング

法政大学総長、社会学部・大学院人文科学研究科国際日本学インスティテュート教授
田中優子

このたび法政大学に、「私立大学研究ブランディング事業」として江戸東京研究センターが発足しました。このセンターの発足は、法政大学にとって大きな意味をもちます。

第1に、大学全体のブランディングとこのブランディング事業とを、一体化して進めることができるという点です。2014年から長期ビジョン「HOSEI2030」のもとで本格的に開始したブランディングは、大学憲章の制定、それともなう新たなミッション・ビジョンの策定、ダイバーシティ宣言などを次々と展開し、教職員によるブランディング・ワークショップを実施しながら、次の時代の法政大学のイメージをつくり続けています。その過程におけるブランディング事業の立ち上げは、大学全体に確実に寄与します。

第2に、このブランディング事業は法政大学における研究の歴史に根付いたものであり、その意味で成功する可能性が高いということです。法政大学の江戸文化研究の歴史は長く、戦前から戦後にかけては近藤忠義が、その後は廣末保、松田修が担ってきました。1980年代には、イタリアの建築史・都市史の研究者である陣内秀信が江戸東京学でも活躍し、さらに田中優子の江戸学が始まりました。陣内秀信は水都の研究で、法政大学エコ地域デザイン研究センターを育て、田中優子は法政大学国際日本学研究所において、横山泰子、小林ふみ子とともに、江戸文化・江戸文学研究を推進してきました。このたびのブランディング事業は、その法政大学エコ地域デザイン研究センターと法政大学国際日本学研究所の連携による「江戸東京研究」拠点の発足なのです。

第3に、この事業が工学系と文化系の結合による事業だということです。法政大学では、デザイン工学部をはじめ、理工系、生命系、情報系の研究者が活躍してきました。人文社会系でも、多くの高名な研究者が活躍し、江戸東京に関わる研究も行われてきました。多摩キャンパスにおいては、「多摩の歴史・文化・自然環境研究会」が、長年にわたって重要な研究を蓄積してきました。

研究拠点という場合は、ひとつには学外の研究者たちとの交流の場として意味があり、もうひとつには、学内で個々に動いている研究者たちがその場を共有することで、新たな研究の枠組みを生み出すことに意味があります。さらに、より広い社会や産業界の人々と組んで、産業や都市づくり、新たな社会の仕組みに寄与する可能性があります。

江戸東京研究センターは、結び付き、交流し、ともに創造する場としての拠点となることを目標としています。4つのプロジェクトが立ち上がっていますが、それぞれが単独に研究を進めるのではなく、テーマを掲げて、すべてのプロジェクトがそこに関わる方法を理想としています。その結び付きが、学外からの参加に扉を開く土台になるはずで、江戸東京研究センターが、法政大学と江戸時代研究、そして東京の未来を拓く役割を果たすことを心から願っています。



田中優子 Tanaka Yuko

1952年生まれ。専門は江戸文芸・文化、アジア比較文化。法政大学大学院博士課程単位取得満期退学。著書に『江戸の想像力』筑摩書房(1986)、『近世アジア漂流』(1990)、『江戸百夢』(2000)ともに朝日新聞社などがある。サントリー学芸賞、芸術選奨文部科学大臣賞ほかを受賞し、2005年には紫綬褒章を受けている。

Born in 1952. Specializes in Edo arts, literature and Asian comparative literature. Doctoral Course of Hosei University Graduate School completed other than dissertation. *Edo no Souzouryoku*, 1986, Chikumashobo, *Kinsei Ajia Hyoryu*, 1990, the Asahi Shimbun, *Edo Hyakumu*, 2000, the Asahi Shimbun, etc.; many editing roles. Awarded the Suntory Prize, Minister of Education Award for Fine Arts. In 2005 received the Medal with Purple Ribbon (*Shiju Hôshô*).

The Research Center for Edo-Tokyo Studies and Hosei University Branding

President, Hosei University; Professor, Faculty of Social Sciences,
Graduate School of Humanities, International Japanese Studies Institute **Tanaka Yuko**

As part of the “Private University Branding Project”, the Research Center for Edo-Tokyo Studies has been created at Hosei University. The inauguration of this Center holds great significance for Hosei University.

Firstly, it enables us to progress with overall university branding and this branding project as one whole. Branding which began in earnest in 2014 under the long-term vision HOSEI2030 has gradually led to the enactment of a University Charter, alongside formulation of new missions and visions, and declarations about diversity etc. With branding workshops held by staff members, we continue to shape Hosei University’s image for the next generation. The launch of the Branding Project within this process will undoubtedly benefit the whole University.

Secondly, this Branding Project has its roots in the history of research at Hosei University, and for that reason its chances of success are high. Research of Edo culture at Hosei University has a long history, led by Kondo Tadayoshi from pre-war into the post-war period, and Hirosue Tamotsu and Matsuda Osamu thereafter. In the 1980s, scholar of Italian architectural history and urban history, Jinnai Hidenobu was active in Edo-Tokyo studies, as Tanaka Yuko’s study of Edo began. Jinnai Hidenobu, through research on water cities, created the Laboratory of Regional Design with Ecology, while Tanaka Yuko, at the Research Center for International Japanese Studies, furthered research of Edo culture and literature, along with Yokoyama Yasuko and Kobayashi Fumiko. This Branding Project, then, has come about from a collaboration between the Laboratory of Regional Design with Ecology and the Research Center for International Japanese Studies to launch “Edo-Tokyo Studies”.

Thirdly, the project will be formed from a combination of engineering and humanities fields. At Hosei University, there has been a tradition of scholars’ research at the Faculty of Engineering and Design, as well as in science and technology, the life sciences and information science. Of course, there are also many eminent scholars who have been active in the humanities and social sciences, who have conducted research relating to Edo-Tokyo. At the Tama Campus, many years’ worth of important research has amassed from the “Tama’s History, Culture and Natural Environment Study Group”.

A research base could mean a place for exchange with scholars from outside the university, or it could mean creating a new framework for research through a shared space for scholars active within the university. Furthermore, this is an opportunity for us to join with people from the wider society and the commercial sector in contributing to business and city planning, and designing a new society.

In this way, the Research Center for Edo-Tokyo Studies will aim to become a base for forming links, exchange and creativity. We have put forward four projects, although each will not advance its research separately; the idea is to raise a theme for which all projects can apply their methods. Such a relationship will necessarily give ground to opening the doors to participation from outside the university.

We sincerely hope for the success of the Research Center for Edo-Tokyo Studies in its role in shaping the future of Hosei University, Edo-Tokyo studies, and Tokyo itself.

江戸東京研究センター設立にあたってのご挨拶

初代 江戸東京研究センター長、法政大学特任教授
陣内秀信

近年、東京に対する海外の人々の注目度は、ますます高まっているように見えます。長い間、世界の都市モデルとされてきた西洋の都市自体が文明の限界を感じ、新たな生き方を求めています。自然と都市を対立するものと捉える志向性をもった西洋とは異なり、水や緑を都市空間のなかにしなやかに取り込み、自然と共生する生活文化と美意識を育んできた江戸東京の都市の独特の姿、仕組みが再評価されています。

そもそも江戸東京の歴史への関心が強まったのは、日本が成熟社会を迎えた1980年代に入ってからのことです。近代化を押し進め、高度成長期を経て経済大国に仲間入りし、物質的な豊かさを獲得した日本人にとって、次に都市の個性、文化的アイデンティティを求める気運が生まれるのは当然でした。

そのなかから、「江戸東京学」が誕生し、学際的な都市学、地域学として新たな研究領域が切り開かれました。これまで日本では、あらゆる学問が、〈江戸＝近世〉と〈東京＝近代〉を分けて考えていました。しかし、実際には文明開化によって都市の姿や人々の暮らしが急に変わるはずがありません。こうして江戸から東京への発展をひとつのパスベクトルのなかで研究する新たな「江戸東京学」が生まれたのです。

このたび誕生した私たちの「新・江戸東京研究」は、80年代の「江戸東京学」を超え、より深く大きく江戸東京の特質を解明するものです。そのため研究の対象をさらに拡大していきます。まずは扱う時代を大きく広げ、東京の歴史を近世の江戸から説く従来の「江戸東京学」を乗り越え、江戸の城下町建設以前の古代・中世からすでに存在し、今の東京のユニークさの源泉となっているこの都市／地域の基層に光を当て、その構造を明らかにします。対象エリアも自ずと、江戸の市域を大きく超え、東の東京低地、西の武蔵野・多摩へと広がります。

私たちの研究活動は歴史を振り返るだけにとどまりません。過去の経験をふまえた近未来の都市像を提示することも本研究センターの大きな役割です。現在の東京が発信するテクノロジーとアートの先端性／固有性にも、欧米とは異なる位相が見られ、その背景を探ることも大きなテーマです。

日本は人口減少、高齢化社会の状況を迎え、価値観の大きな転換が必要となっています。そして今、ますます強まるグローバル化の進展に対し固有の文化力を発揮するためにも、また大きな課題である持続可能な地球社会を実現するためにも、江戸を下敷きにする独自の歴史に裏打ちされた東京らしい都市の近未来像を描くことが求められているのです。

本研究センターは、都市東京のこうしたユニークな特質を生み出す基層構造をハードとソフトの両面から解き明かし、西洋型の都市モデルとは異なる21世紀にふさわしい都市のあり方を研究していきます。私たちは世界に、また同時に社会に、そして地域に開かれた研究組織を目指しております。皆様のご参加、ご協力を心よりお願い申し上げます。



陣内秀信 Jinnai Hidenobu

1947年生まれ。専門はイタリアを中心とする地中海世界、東京などをフィールドとする都市研究。東京大学大学院博士課程修了。博士(工学)。ローマ大学名誉学士、アマルフィ名誉市民。サントリー学芸賞を受賞した『東京の空間人類学』筑摩書房(1985)、『水都ヴェネツィア その持続的発展の歴史』法政大学出版局(2017)など著作多数。

Born in 1947. Specializes in the Mediterranean world centering on Italy, urban studies of Tokyo etc. Graduated Doctoral Course, University of Tokyo Graduate School. Doctor of Engineering, Honorary Degree, Sapienza University of Rome. Honorary Citizen of Amalfi. Awarded the Suntory Arts Prize for *Tokyo no Kukan Jinruigaku*, 1985, Chikumashobo. Numerous works include *Suito Venezia: Sono Jizokuteki Hatten no Rekishi*, 2017, Hosei University Press.

Marking the Establishment of the Research Center for Edo-Tokyo Studies

First Director of the Research Center for Edo-Tokyo Studies, Professor, Hosei University
Jinnai Hidenobu

In recent years, we have seen the level of attention toward Tokyo gradually increase among people from outside Japan. For a long time, the Western cities themselves which were the model for cities worldwide seem to have reached limits in their civilization, and are seeking new ways of living. Unlike the West where nature and city intentionally oppose each other, reassessment is underway of the unique structure of the city of Edo-Tokyo, where water and greenery are incorporated into the city space, and where the culture of everyday life and aesthetics naturally coexist.

Historical interest in Edo-Tokyo grew in the 1980s when Japan became a mature society. It pressed for modernization, and a period of high growth then saw it welcomed into the fold of economic giants. Having achieved material wealth, the Japanese people next gathered momentum towards seeking individuality in their cities, and a cultural identity of their own.

Out of this emerged “Edo-Tokyo Gaku” (Edo-Tokyo Studies) that created the new research realms of academic urban studies and regional studies. Until that point, all scholarship in Japan was based on the clear distinction of Edo equating to “Premodern”, and Tokyo, to “Modern”. It was impossible, however, for cities and people’s lives to undergo any immediate change as a result of the Enlightenment. “Edo-Tokyo Studies” was a way to research the development from Edo to Tokyo from within a single perspective.

Our “New Edo-Tokyo Studies” born here transcend the “Edo-Tokyo Studies” of the 1980s to reveal more deeply and widely the special nature of Edo-Tokyo. To this end, our research focus will expand further. Firstly, the span of the eras under consideration will increase, looking back past Premodern Edo as the history of Tokyo-centered definitions of “Edo-Tokyo Studies”, to shed light on the foundations of this city/region that existed from before ancient and medieval times – prior to establishment of Edo as castle town – and whose structure are the source of the uniqueness of Tokyo today. The land area of focus will likewise grow, stretching beyond the Edo city limits to the Tokyo lowlands in the east and Musashino and Tama in the west.

Our research activities are not confined to reflecting on history. An important role of this Research Center is to suggest an image of the city in the near future based on experience of its past. Present-day Tokyo produces individualistic, cutting-edge technology and art – a phase at odds with its Western counterparts – and investigating the background to this will prove a major theme.

Japan has a decreasing population and faces an aging society, and a great about-turn in values is necessary. Furthermore, in order to present its own cultural strength in the face of advancing globalization, and to realize the great goal of a sustainable global community, it must draw up a prototype for a future Tokyo-like city, with Edo at its base and supported by its own particular history.

This Research Center will bring to light both the hard and soft aspects of the basic structure from which the unique entity that is the city of Tokyo emerged, and investigate the possibility of a city fit for the 21st century that is not modelled on Western cities. We aim towards a research organization that is open to the world, society, and the local area. We greatly look forward to your participation and cooperation.

江戸東京研究センター長就任にあたってのご挨拶

江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授
横山 泰子

1980年代に提唱された「江戸東京学」の基本的な姿勢は、江戸と東京を単純に二分するのではなく、結びつけて見るものでした。〈江戸＝近世〉〈東京＝近代〉といった時代別研究法では把握できない都市の本質にせまるため、「江戸東京」という言葉が使われたのです。多くの研究者が江戸東京学という場に集まり、学際的な都市の学問、新たな地域研究が切り開かれました。その研究者たちの中に、江戸文学・江戸文化研究を国際的かつ斬新な視点から推進してきた田中優子法政大学総長、イタリアの都市と東京を水都という観点で見直し新鮮な都市論を展開した陣内秀信法政大学特任教授の姿があったことは、言うまでもありません。

今から振り返ってみますと、江戸東京学の時代にはあまり意識されなかったことが、時代の変化とともに大きな問題となっていることに気がつきます。例えば、環境問題です。1980年代にももちろん、江戸東京の自然、都市と環境といったテーマは研究されていました。しかし、現代に至るまでのあいだに環境問題はいよいよ深刻化し、東日本大震災が起こりました。この現実を直視し、持続可能性といった観点から、江戸東京研究を行う必要があります。また、昔から言語や文化を異にする人々が集まってきた江戸東京ですが、特に近年、文化の多様性が意識されるようになりました。地球環境問題の悪化と、グローバル化が進んだ現代においては、私たちが意識しなければならないのは、環境問題と国際化の点ではないでしょうか。

都市の環境問題の研究を重ねてきた法政大学エコ地域デザイン研究センターと、日本文化研究を国際的な観点で進めてきた法政大学国際日本学研究所が連携する本江戸東京研究センターでは、現代的な問題意識で、江戸東京研究を進めていきたいと思えます。外国からの研究者や留学生などとの交流の場をもち、世界と接点をもつ大学の強みを生かし、国際都市としての東京の特質を多様な視点で考察していくことも可能と思われまます。

現在の江戸東京研究センターには、4つの研究プロジェクトがあります。江戸東京というと、歴史すなわち過去を向いた研究というイメージがつきまといがちです。そこで、歴史をふまえたうえでの東京の現状、近未来の東京について考えられるよう、研究活動を行います。

江戸東京という巨大な都市を研究対象にする以上、異分野の研究者が学外の方々とともに対話をしながら問題を考えていかなければなりません。このたび陣内秀信教授からセンター長のバトンを渡された私も、かつては江戸東京学に心惹かれる学生の一人でした。その頃の初心を忘れず、「世界と同時に、社会に、そして地域に開かれた研究組織を目指す」という初代センター長の志を継承してまいります。

どうか皆様のご理解、ご協力、そしてご参加を心よりお願い申し上げます。



横山 泰子 Yokoyama Yasuko

1965年生まれ。専門は日本近世・近代の怪談文化。国際基督教大学大学院博士課程修了。博士(学術)。日本古典文学会賞受賞を受賞した『江戸東京の怪談文化の成立と変遷—一九世紀を中心に—』風間書房(1997)のほか、主な著書に『綺堂は語る、半七は走る』教育出版(2002)、『妖怪手品の時代』青弓社(2012)などがある。

Born in 1965. Specializes in Japanese pre-modern and modern ghost-story culture. Graduated Doctoral Course, International Christian University Graduate School. Doctor of Philosophy. Awarded Japanese Classical Literature Society Prize for *Edo-Tokyo no Kaidan Bunka no Seiritsu to Hensen: Jyukyū Seiki o Chushin ni*, 1997, Kazamashobo. Other works include *Kido wa Kataru, Hanshichi wa Hashiru*, 2002, KYOIKU-SHUPPAN, and *Yokai Tejina no Jidai*, 2012, SEIKYUSHA.

Inaugural Address as Second Director of the Research Center for Edo-Tokyo Studies

Second Director of the Research Center for Edo-Tokyo Studies,
Professor, Hosei University Faculty of Science and Engineering Yokoyama Yasuko

The fundamental feature of the “Edo-Tokyo Studies” advocated in the 1980s was not in dividing Edo and Tokyo into two, but in looking at them joined together. The term “Edo-Tokyo” was used in order to narrow in on the essence of the city that cannot be grasped through research methods that separate eras by equating Edo with pre-modern, and Tokyo with modern. Many scholars flocked to the scene of Edo-Tokyo studies, opening up interdisciplinary urban scholarship and new regional research. Vital among those scholars were Hosei University President Tanaka Yuko, who advanced research in Edo literature and culture from international and novel perspectives. Also, Hosei University Professor Jinnai Hidenobu, who developed a new urban theory by reevaluating Italian cities, as well as Tokyo, from the viewpoint of water city.

Looking back today, we notice that elements mostly unconsidered during the era of Edo-Tokyo Studies have become large issues with the changing of the times. For example, the issue of the environment. Of course, even in the 1980s, themes were researched such as Edo-Tokyo’s nature and urban environment. Since then, however, environmental issues have gradually intensified, and the Great East Japan Earthquake occurred. Facing these realities there is need to conduct research of Edo-Tokyo from the viewpoint of sustainability. Also, from the past, people with different languages and cultures have gathered in Edo-Tokyo, and recently, in particular, there has been acknowledgement of cultural diversity. With worsening global environmental issues and increasing globalization, we in the present day must surely be conscious of the issue of the environment and internationalization.

The Hosei University Laboratory of Regional Design with Ecology, having amassed research in urban environmental issues, and the Hosei University Research Center for International Japanese Studies, having progressed in Japanese cultural research from an international standpoint, combine within the Research Center for Edo-Tokyo Studies to further Edo-Tokyo research with a consciousness of today’s issues. We hope to provide opportunity for exchange with scholars and students from overseas, utilize the university’s asset as point of contact with the world, and examine the characteristics of Tokyo as international city from diverse perspectives.

The new Research Center for Edo-Tokyo Studies has four research projects. “Edo-Tokyo” brings with it an image of research directed towards history or the past. Here we have designed our research activities to consider the current state of Tokyo, and Tokyo’s near future, based on history.

With our research focus the megalopolis of Edo-Tokyo, we must consider issues in parallel discussion with scholars in different fields from outside the university. On this occasion I am passed the baton of Center Director from Professor Jinnai Hidenobu. I too was once a student who was captured by Edo-Tokyo Studies. Without forgetting that beginner’s feeling, I shall take on the resolution of our first Center Director, “To aim towards a research organization open to region, society, and the world.”

I look forward very much to everyone’s understanding, cooperation and participation.



法政大学のアイデンティティと将来ビジョン

法政大学は、2017年、社会に対して大学としての存在意義や使命を積極的に発信するために、これまでの歩みと教育研究の現状を分析し、その結果をふまえて「自由を生き抜く実践知」を標語とした〈法政大学憲章〉を定めた。これは、人の権利を何よりも重んじるフランス系の法律学校として明治13(1880)年に誕生した本学が、戦前以来、個々人の存在とその多様性を最大限に尊重しながら社会の発展に貢献しようとする「自由と進歩」の学風を培ってきたことを土台としている。〈法政大学憲章〉は、そのうえに立って「社会や人のために、真に自由な思考と行動を貫きとおす自立した市民」の輩出と、「地域から世界まで、あらゆる立場の人びとへの共感に基づく健全な批判精神をもち、社会の課題解決につながる『実践知』を創出」して「持続可能な社会の未来に貢献」することを謳っている。

本事業の目的

本事業の構想のもととなったのは、その〈法政大学憲章〉のうち、とりわけ、世界を視野に入れつつ、それぞれの地域性を重視し、そこに生きる多様な立場の人々それぞれにとってよりよい未来と、それを支える持続可能な社会を実現することに貢献しようとする志である。

本学が位置する江戸東京は、循環型都市として世界的に再評価され、地球環境問題、グローバル化の浸透に抗する地域の自立、成熟社会における質の高い社会の発展などへの対応が世界的に求められている現代において、さまざまな課題解決の糸口を提供する可能性をもつ。

この事業は、江戸東京をフィールドとして、学内外の知を結集

して新たな広域都市モデルを構築することを目的とする。本学における江戸東京に関する幅広い領域からの膨大な研究蓄積に立脚し、法政大学国際日本学研究所と法政大学エコ地域デザイン研究センターの連携によって文理の垣根を超え、国際的な視角も加えながら、大学をあげて新たな江戸東京モデルを提示していくことを目指す。それは1980年代以来、学内外で行われてきた「江戸東京学」を現代にふさわしいかたちで発展させ、その成果を世界に発信することになるだろう。

現代の江戸東京研究として

本研究の新たな方向性のひとつは、〈近世＝江戸〉と〈近代＝東京〉の連続と断絶を見るという従来の江戸東京学の発想を越えて、古代に遡ってその独自性と強みの根源を見極めていく点にある。江戸市域(現都心部)に限定することなく、田園や近郊農村だった多摩や葛西地域など広域(テリトリー)を対象とする。これは本学の3キャンパスの立地とも重なり、本学の教育ビジョンに謳うキャンパス間の連携を推進することにもつながる。

本研究ではさらに、当初の江戸東京学が謳われた1980年代からの世界の変貌と、東京の変容を見つめながら、諸学問の進展と視座の変化をふまえた現代的な観点に立つ、4つの新しい切り口から江戸東京を考究する。それによって東京が現代まで持続的な発展を続け、その個性が世界に認められてきた秘密を解明していきたい。さらに、西欧型都市モデルとは異なる新たな都市モデルを提示、私たちが住む近未来を構想し、社会実装することを志す。本事業を通して当センターが世界的な江戸東京研究の拠点となり、江戸東京への関心をますます高めていくことに寄与したい。

Hosei University's Identity and Future Vision

In order to positively communicate to society the importance of our existence and mission as a university, in 2017, Hosei University analysed its journey to date and its current state of education and research, and, based on those results, decided on a "Hosei University Charter" with its motto "Practical Wisdom for Freedom". The university was founded in Meiji 13 (1880) as a French-style law school putting people's rights above all else. It has its basis in an academic tradition of "Freedom and Progress" fostered from before the war that aimed to contribute to the development of society with the utmost respect for individuals and their diversity.

The "Hosei University Charter" upholds this to produce "independent citizens who carry out their work for the society and the people based on well-grounded principles and unrestricted thinking" and "promotes sound critical thinking based on sympathy for all people, both locally and internationally, and the creation of ideas for solving social problems based on 'practical wisdom'", and it vows it "will contribute to the future of sustainable societies."

Aims of this Project

It is this intention found in the "Hosei University Charter" - in particular, of taking a global perspective, respecting regionality, of trying to improve each future of the diverse people living there, and of contributing to achieving sustainable societies to support them - that has formed the notion of this project.

The Edo-Tokyo mapped by this university is being redefined worldwide as a sustainable city. In the present day, answers are being sought on a world-wide scale to global environmental issues, regional autonomy resisting the onslaught of globalization, and the development of high-quality society in mature societies etc., and it has the potential for providing clues about solving many of these issues.

With that in mind, this project aims to gather wisdom from inside and outside the university in the field of Edo-Tokyo to construct a new greater-city model. Based on the huge accumulation of

research at this university from the broad domain that is Edo-Tokyo, and overcoming the barrier between humanities and sciences through a collaboration of the Research Center for International Japanese Studies and Laboratory of Regional Design with Ecology, our goal is to promote our university in offering a new Edo-Tokyo model with additional international perspectives. We will further advance, in a way appropriate for today, the "Edo-Tokyo Studies" that has run both inside and outside of this university since the 1980s, and communicate our results worldwide.

Present-Day Edo-Tokyo Research

One new direction for this research is overcoming the stance in Edo-Tokyo studies that equates pre-modern with Edo and modern with Tokyo in looking for continuity and intermittency. It instead identifies the uniqueness and strong roots by looking back to ancient times. We are not confined to Edo city limits (today's central zone), but focus on the greater area (Territorio) that includes what were the arable land and surrounding farming villages like Tama and Kasai. These coincide with the locations of the three campuses of our university, and will also link to advancing the ties between the campuses advocated in our university learning vision.

This research, furthermore, analyses Edo-Tokyo from four new openings that observe how the world has transfigured since the 1980s when Edo-Tokyo studies were first lauded, as well as the changes this city itself has undergone. It also takes an up-to-date standpoint founded on shifts in direction and perspective within various academia. In this way we hope to reveal the secret of how Tokyo has continued to attain sustainable growth, and how its individuality has come to be acknowledged by the world. This will be key in presenting a new city model that differs from the Western European-type model, conceiving the near future of where we live, and carrying out their social implementation. We hope that through this project the Center will be confirmed as base for world-wide Edo-Tokyo studies, and will increasingly raise interest in Edo-Tokyo.

ダイアグラム | EToS Diagram

法政大学ブランド
Hosei University Brand

江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成
Formation of a Leading Interdisciplinary Base for Edo-Tokyo Studies

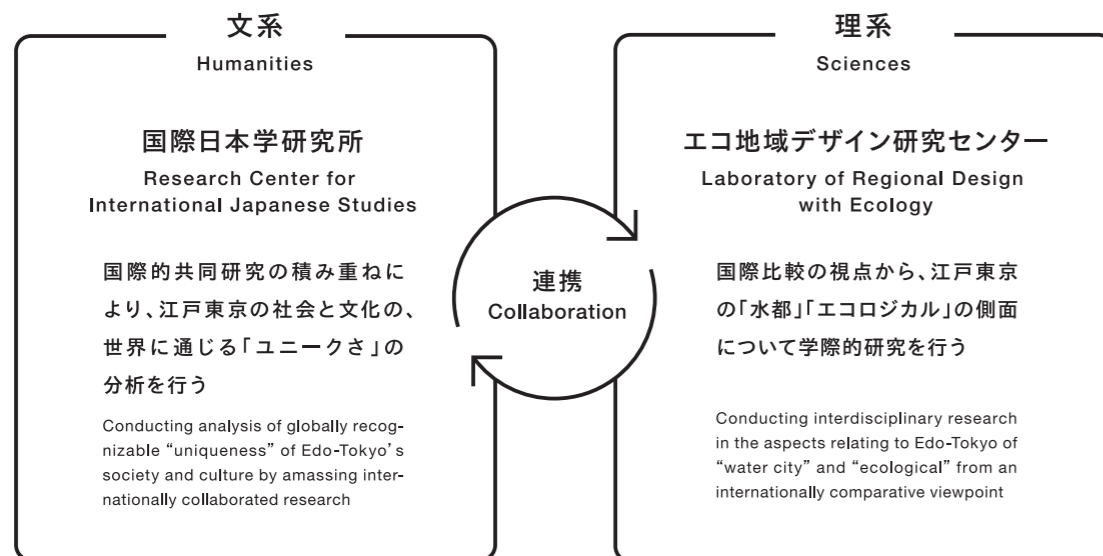
法政大学憲章：自由を生き抜く実践知
Hosei University Charter — “Practical Wisdom for Freedom”

全学体制
Overall University Framework

真に自由な思考と行動を貫きとおす自立した市民を輩出して世界における市民教育の拠点となり、基礎研究・実践的研究により持続可能社会を創造する源泉となる

We strive to educate independent citizens with well-founded principles and unrestricted thinking, to become a global center for citizens' education, and to be a wellspring of knowledge and ideas for the development of a sustainable society through basic and practical research.

本学3キャンパスの有機的な連環
Organic links between the three campuses of Hosei University



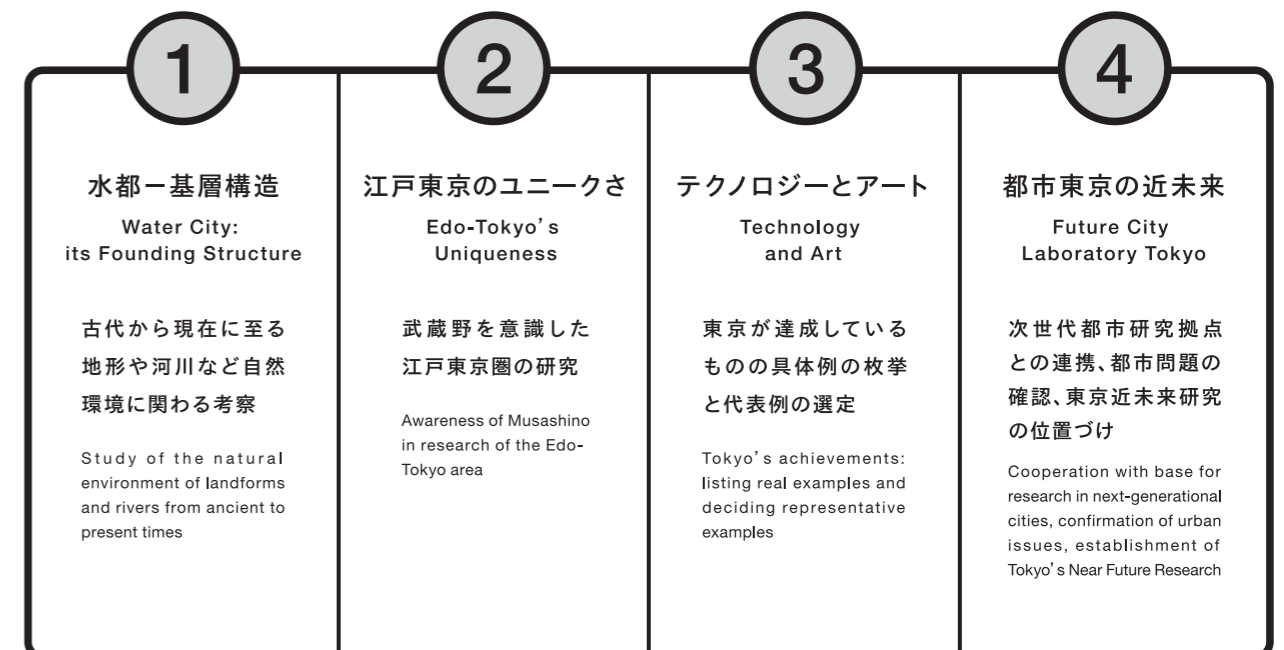
「江戸東京研究センター」を設立
Establishment of the “Research Center for Edo-Tokyo Studies”

江戸東京から持続可能な地球社会の未来を目指して
From Edo-Tokyo to a Future of Sustainable Global Communities

推進と成果
Progress and Results

- 江戸東京の「ユニークさ」の解明 Explaining Edo-Tokyo’s “uniqueness”
- 本学の江戸東京研究の蓄積を活かす Reviving the mass of Edo-Tokyo research at the university
 - 1. 古代にまで遡り根源を探る 1. Searching for roots back in ancient times
 - 2. 現代東京についても考究 2. Also investigating Modern-day Tokyo
- 持続可能な近未来都市の提案 Plans for a near-future sustainable city
- 江戸東京研究の世界に向けた発信 Disseminating Edo-Tokyo studies worldwide

4つの研究プロジェクト
4 Research Projects



1

Project 1 水都—基層構造 Water City : its Founding Structure

古代から現在に至る地形や河川など自然環境に関わる考察
Study of the natural environment of landforms and rivers from ancient to present times

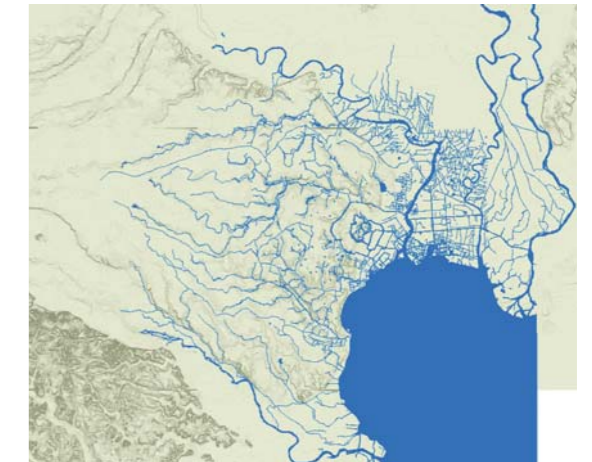
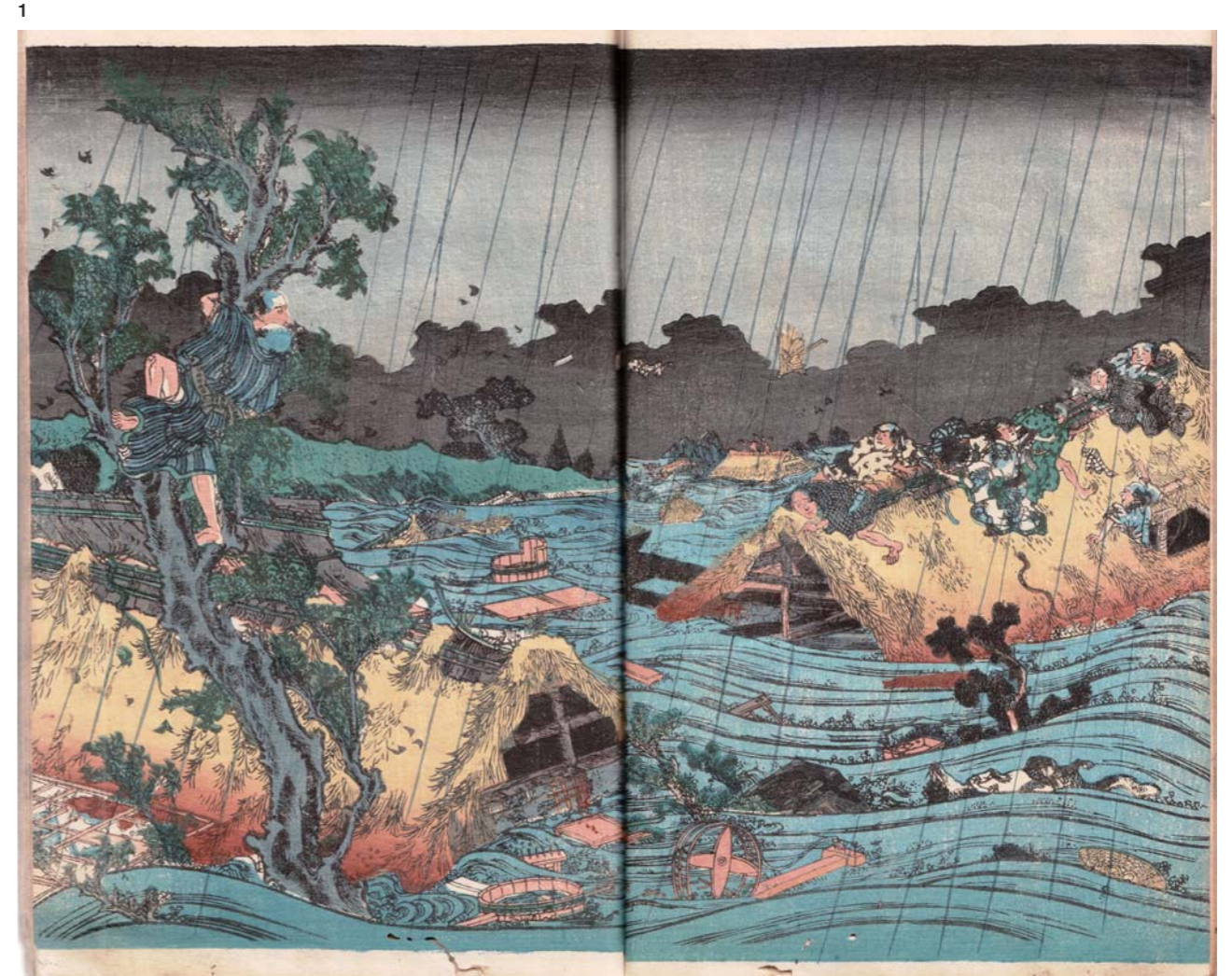
法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 高村雅彦
Professor, Hosei University Faculty of Engineering and Design, Project Leader Takamura Masahiko

水辺が都市の財産であることを知り、東京にしかない歴史と風景の集積を総合的に明らかにしつつ、それを活かした新しい都市ビジョンを示すことが、本プロジェクトの目的である。特に、江戸東京が長く生き続けるその理由と意味を解明するために、これまであまり注目されてこなかった古代・中世から綿々につながる大地や自然と結び付いた都市と地域の基層構造の解明を追求していく。

水の脅威を感じながらも、その空間が本来もっている多義性を十分に享受した時代、水を積極的に利用して工業化を推し進めた時代を経て、いったん水から離れ、再びその空間の豊かさを取り戻すための試みが蓄積されつつあるのが現在である。環境の時代といわれる21世紀に、自然の恵みとよりよい共生の関係をいかに保ちながら多彩に付き合うことができるか。水から身を守るのと同時に、水の恩恵をふんだんに得てきた江戸東京の多様な水辺から今、都市と地域の歴史、そしてその再生への可能性を探る時代が到来している。初代センター長の陣内秀信とともに提唱した「水都学」では、世界の水都を対象に、河川や運河、港湾の機能と役割、環境や生態、また防災、制度といった、過去と現在のそれらを取り巻く多様な観点からの論考を積み重ねてきた(『水都学I~V』陣内秀信・高村雅彦編、法政大学出版局 2013~2016)。そこでは、単に対象としての水都の魅力を掘り起こそうとした

We know that waterfronts are an asset for a city; the aim of this project is to reveal on a comprehensive scale the build-up of history and landscape only to be found in Tokyo, and to put this to good advantage in proposing a new vision for the city. In order to clarify the reason for Edo-Tokyo's long survival, as well as its significance, we will investigate in particular the founding structure of the region and city, whose bonds with land and nature have continued from ancient and medieval periods, although remain largely unconsidered.

Water has always been deemed a threat. In the past, once the natural equivocality of its space was sufficiently accepted, however, water began to be utilized in positive ways, and later brought in the period of industrialization. For a while we turned our backs on water, but now attempts are growing to repair the richness of its space. In the 21st century, called the age of the environment, how can we maintain a better co-existence with nature and engage in various ways in its joys? The time has come to examine the history of city and region - and the possibility of its renewal - focusing on the diverse waterfronts of Edo-Tokyo, that have protected lives from the dangers of water, and where water has provided abundant benefits. "Water City", proposed alongside our first Center Director, Jinnai Hidenobu, has already produced a wealth of research on water cities of the world from various perspectives in the past and now: rivers and canals, the function and role of ports, environment and wildlife, and also disasters and organizations (Jinnai Hidenobu, Takamura Masahiko eds. *Suitogaku I-V*, Hosei University Press, 2013-2016). The focus was not in presenting the charm of a water city,



1. 安政3(1857)年の大地震による本所羅漢寺付近の津波による大水 (『安政風聞集 中巻』法政大学図書館蔵)
2. 品川荏原神社の海中渡御。神輿をお台場まで船で運び、海中に担ぎ入れる儀式。御輿、人、そして神が水と一体となる。日本を含むアジアの水と水辺は精神性と身体性に富む。その特徴を明らかにしていきたい。
3. 江戸水系図。尾張屋版切絵図と明治迅速図から作成(作成者:神谷 博)。
1. Flood caused by tsunami near Rakanji Temple Main Building following the Great Earthquake of Ansei 3 (1857) (Ansei Fubunshu Vol. 2, Hosei University Library)
2. Procession in the water at Ebara Shrine in Shinagawa. A ceremony in which a portable shrine is carried by boat to Odaiba, and then carried through the sea. The shrine, people and gods become one with the water. Water and waterfronts of Asia, including Japan, are rich in spirituality and embodiment. We hope to reveal more about this special feature.
3. Plan of Edo Water Systems
Compiled from "Owari-ya Ban Kiriezu" and "Meiji Jinsokuzu" (Compiler: Kamiya Hiroshi)

のではなく、都市を解読し、新たな視点を見出し、時代を読んで、次へと更新するための横断的な研究方法としての〈水都学〉の確立を目指した。

その過程で、次に重要な視点として浮かび上がってきたのが、古代・中世という時代と地形や地質と結び付いた、いわゆる基層構造である。自然の地形や地質を根底に、それと結び付く人文的な文化の基層がその上に形成され、それらが後の都市と地域のコンテキストや仕組みのベースをなして人々の営みが展開する。そこでは、常に水が中心的な役割を担ってきたのであって、こうして捉えることで、水都をより正しく理解できるのではないかと考える。目に見える物質的なものを工学や技術の面から明らかにするだけでなく、水が本来もつ精神性とのように結び付いて、いかなる地形や自然からの影響を受けて都市や個々の場が成立、形成されたのかを探ることが今求められている。

自然条件、特に豊かな水系を基盤とした有機的な都市と地域の関係を解明して、歴史・環境・文化を活かした今後の東京のビジョンを示すとともに、自然と共生する21世紀にふさわしい都市づくりの理念と手法を日本モデルとして海外に発信することが最も重要かつ最終的な成果として期待できるだろう。このプロジェクトは、そのための開かれたプラットフォームづくりの一翼を担っていく。

but to mark the establishment of “water cities studies” as a cross-cutting research method for understanding cities, discovering new viewpoints, and reading the era in a move towards subsequent regeneration.

This process has given rise to our next important perspective: the founding structure, the point of connection of topography and geology with ancient and medieval civilization. The foundations of human culture, rooted in, and built on top of, these natural landforms and geological features, became a base for later urban and regional contexts and mechanisms, and development of human enterprise. Water played a central role at every stage, and by perceiving it in this way we hope to gain a more correct understanding of water city. We will not just analyze things we see from a technological and technical aspect, but also find how they connect to the spirituality that water has always possessed, how the city and individual locations were created and shaped influenced by various landforms and natural elements.

In this way, we will clarify the connection between region and organic city founded on natural conditions - in particular an abundant water system. By indicating our vision for a future Tokyo that makes the best of its history, environment and culture, we anticipate our most important and final result to be sharing overseas - with Japan as model - the concept and method of creating a city where we coexist with nature in a way fitting for the 21st century. This project will take on the role of developing an open platform for this purpose.



4



Photo by Hiroshi Aoki

高村雅彦 Takamura Masahiko

1964年生まれ。専門はアジア都市史・建築史。法政大学大学院博士課程修了。博士(工学)。前田工学賞、建築史学会賞を受賞。編著に『タイの水辺都市 天使の都を中心に(水と<まち>の物語)』法政大学出版局(2011)、『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』山川出版社(2000)などがある。

Born in 1964. Specializes in the history of Asian cities and architecture. Graduated Doctoral Course, Hosei University Graduate School. Doctor of Engineering. Awarded the Prize for the Maeda Engineering Foundation's and the Society Prize of Architectural Historians of Japan. Editor and author of works including, *Tai no Mizube Toshi: Tenshi no Miyako o Chushin ni* [Mizu to "Machi" no Monogatari], 2011, Hosei University Press, and *Chugoku Konan no Toshi to Kurashi: Mizu no Machi no Kankyo Keisei*, 2000, Yamakawa Shuppansha.

5



6



4. 富岡八幡宮の七渡神社。まだこのあたりが海中であった頃から存在する地主神。富岡八幡よりも歴史は古く、社殿は小さいが、今も水に囲まれてその存在を誇示している。

5. 御茶ノ水の神田川と聖橋、丸の内線。神田川を中心に、人、車、電車、そして船が交わる交差点が、橋のデザインによって美しく飾られる。まさに水都と呼ぶにふさわしい。

6. お台場の風景。左手前は幕末の第三台場、奥は第六台場、その向こうは震災後の芝浦、日の出、竹芝の各棧橋。左手は1967年日本初の品川コンテナ埠頭。天気の良い日には遠方に富士山、右手に奥に東京タワー、その後方に東京都庁舎が見える。日本の都市は、各時代の層が幾重にも重なって存在するのが特徴といえそうだ。

7. 隅田川木母寺の水神。水神は、女性の神で、蛇体をもって形象化する。水神は江戸の要所、とりわけその領域を示す場所に置かれて都市を守護したことを解明する。

4. Nanawatari Shrine at Tomioka Hachimangu. Land deities perceived from the time when this area was submerged. With a history older than that of Tomioka Hachimangu, the shrine building is small, but still today is marked by a surround of water.

5. Kandagawa River and Hijiribashi Bridge at Ochanomizu, Marunouchi Line. With Kandagawa River at its center, an intersection of crossing people, cars, trains and also boats, esthetically enhanced by the bridge design. Befitting the appellation of water city.

6. Landscape at Odaiba. In the left foreground the Third Battery from the Bakumatsu era, with the Sixth Battery behind. Beyond that, post-earthquake Shibaura, Hinode and Takeshiba piers. To the left, Japan's first container terminus constructed in 1967 at Shinagawa. On clear days Mt. Fuji is visible in the distance; far away on the right is Tokyo Tower, and beyond that the Tokyo Metropolitan Government Building. It is a characteristic of Japanese cities to consist of an accumulation over the years of several layers.

7. Water Deity of Mokuboji Temple on the Sumidagawa River. The water deity is a female god with the body of a snake that can transform itself. The water deity, we find, guarded the city at strategic points in Edo, in particular those locations that defined its limits.



7

2

Project 2 江戸東京のユニークさ Edo-Tokyo's Uniqueness

武蔵野を意識した江戸東京圏の研究

Awareness of Musashino in research of the Edo-Tokyo area

江戸東京研究センター長、法政大学理工学部教授、プロジェクトリーダー 横山 泰子

Second Director of the Research Center for Edo-Tokyo Studies,
Professor, Hosei University Faculty of Science and Engineering, Project Leader Yokoyama Yasuko

江戸東京のユニークさとは、何か。

この大きな問題に、私たちのチームは取り組むことにした。ユニークさとは、珍しさであり、個性である。そして、長所であると同時に短所でもある。江戸東京のユニークさを考えることは、この都市の価値を発見し、守り、活用していくことにつながるだろう。それと同時に江戸東京特有の問題をあぶり出し、解決につながる道を考えることは、大学憲章「自由を生き抜く実践知」を謳う本学の課題でもある。

事業全体を通じ、江戸東京のユニークさを、常に自然条件からめて研究し、成果を上げることが目的としている。江戸東京と自然の問題は、これまで法政大学エコ地域デザイン研究所が担ってきたが、多様な専門の文系の研究者集団である法政大学国際日本学研究所が加わることで、より深い議論を展開しつつ、研究成果社会に広く還元することを目的とする。

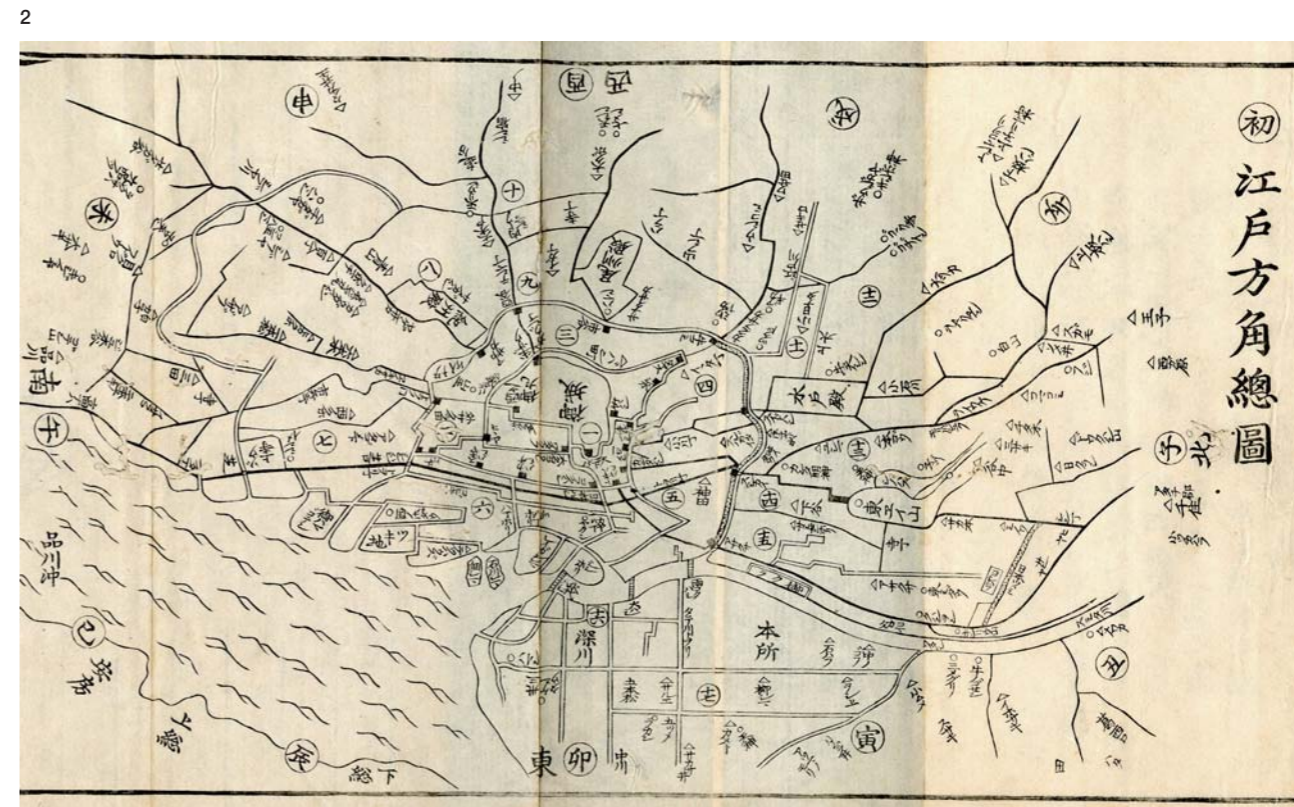
哲学者の和辻哲郎は、『風土』岩波書店(1979)の中で、東京を世界の他の都市と比べ「広さのために病める都会の世界的な例」と言い、東京のさまざまな面を「珍しい現象」と考えた。西欧の都市モデルが色褪せた今、和辻の否定的な見方は逆に優れた特徴として注目される。江戸東京が広さを誇る大都会になり得たのは、自然条件に

What is unique about Edo-Tokyo?

Our team has made the decision to tackle this great issue. Uniqueness means rarity, or individuality. Uniqueness has advantages as well as disadvantages. Considering the uniqueness of Edo-Tokyo will hopefully lead to discovering, preserving and making good use of the value of the city. At the same time, problems particular to Edo-Tokyo will reveal themselves, but thinking of ways towards their solution is what we uphold in our University Charter: "Practical Wisdom for Freedom".

We aim to engage the entire project in fruitful research of the uniqueness of Edo-Tokyo from its close relationship with natural conditions. The issue of Edo-Tokyo and nature has hitherto been the realm of the Laboratory of Regional Design with Ecology, but with the addition of the Research Center for International Japanese Studies' group of scholars of various specialties within the arts, whilst developing deeper discussion, our goal is to restore the results of our research to society.

Philosopher Watsuji Tetsuro in his Climate and Culture, in a comparison with other cities around the world, said of Tokyo, "Due to its size, a global example of an ailing metropolis". He also considered Tokyo a "rare phenomenon" from various aspects. Now that the Western European city model has faded, Watsuji's negative view can in fact be considered a superior characteristic. Tokyo's sprawl did not begin in the modern age; it was already the case in the days when it was known as "Edo". In fact, Edo-Tokyo's ability to boast the size of a great metropolis was largely due to natural conditions.



1. 石川流宣「大日本国正統図」(1708年刊)より武蔵国周辺(部分)法政大学国際日本学研究所蔵
江戸前期に最も広く普及した日本図のうち江戸周辺。

2. 『安見御江戸絵図』(1769年刊)より「江戸方角総図」江戸東京研究センター蔵
江戸を地域ごとに分割した地図のさきがけとなった折本のうち、巻頭図。

1. Environs of Musashi no Kuni (part) from "Dai Nihonkoku Shotozu" (1708; by Ishikawa Tomonobu). Hosei University Research Center for International Japanese Studies Collection
The environs of Edo from the map of Japan most widespread during the Early Edo Period.
2. "Edo Hogaku Sozu" from Anken Oedo Ezu (Easy-View Map of Edo; 1769). Research Center for Edo-Tokyo Studies Collection
Opening illustration of folding book that was the forerunner of maps dividing Edo into different areas.

よるところが大きい。自然環境の面から見た近世以前の江戸東京については、2018年1月のシンポジウム「江戸東京の基層／古代・中世の原風景を再考する」を開催したが、このテーマはさらに掘り下げたいと考えている。

それに加え、近世以後の「江戸東京の名所・景観研究」をテーマとした研究を行う。広い江戸東京には、数多くの名所がある。地誌やガイドブック、名所絵、文芸、地図などに表象された江戸東京の名所の歴史をひもとき、現代東京のユニークさを発見する手がかりを見出していく。『風土』関連のシンポジウム、定例研究会を企画し、学際的なメンバー構成によって多様な視点での研究を行う。

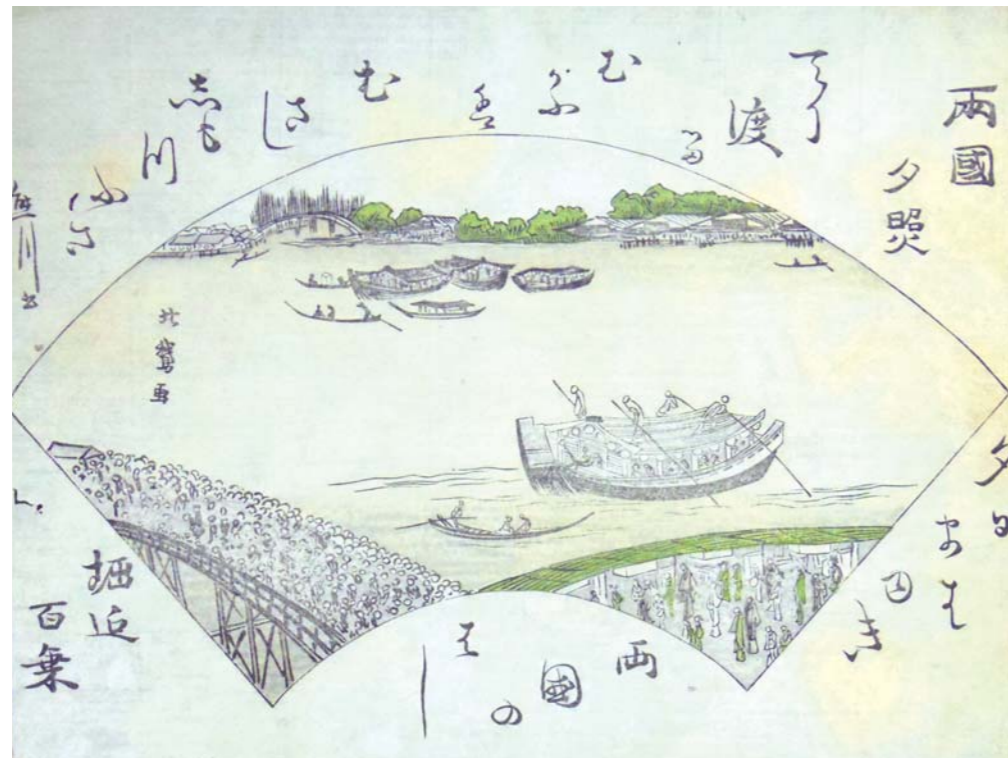
元来、法政大学図書館は、東京都の歴史と地誌類を集めた「江戸文庫」、多摩地域の市町村史等のコレクション「多摩地域資料」や「和辻哲郎文庫」など、基礎資料を持っている。それらを有効活用しつつ、法政ミュージアムの開設までに資料整備をし、公開に向けた準備をしていく。そのほか、東京の町歩きが楽しくなるようなテーマ性のある地図づくりを企画し、江戸東京のユニークさを歴史から学び、現代に活かせるような試みを考えている。

Edo-Tokyo of before the pre-modern era, seen from aspects of the natural environment, was a theme raised in a symposium held in January, 2018: "Edo-Tokyo's Foundations: Reexamining the Ancient and Medieval Landscape".

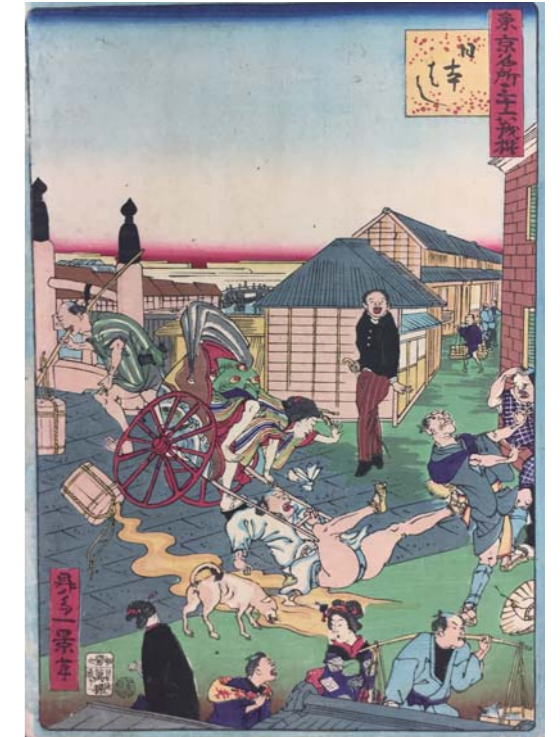
In addition, we will carry out research on the theme of "Research of Famous Places and Scenery in Edo-Tokyo", from pre-modern times onwards. There are numerous famous places over the breadth of Edo-Tokyo. We will plot the history of Edo-Tokyo's famous places as symbolized in geographies and guidebooks, landscape pictures, art and literature, maps etc. revealing clues to discovering the uniqueness of present-day Tokyo. We are planning a symposium on Climate and Culture, and regular study groups, and research from diverse viewpoints will emanate from our organization of academic members.

From its outset, Hosei University Library has been in possession of fundamental material such as the "Edo Bunko": collected histories and geographies of Tokyo city, "Tama Chiiki Shiryo": a collection of histories etc. of the cities, towns and villages in the Tama region, and the "Watsuji Tetsuro Bunko (Library)". Whilst putting it to effective use, we will sort the material in preparation for making it public in time for the opening of the Hosei Museum. We also plan to create themed maps for enjoying walking around Tokyo, and consider other ways to learn from history about Edo-Tokyo's uniqueness, and bring it to life in the present day.

3

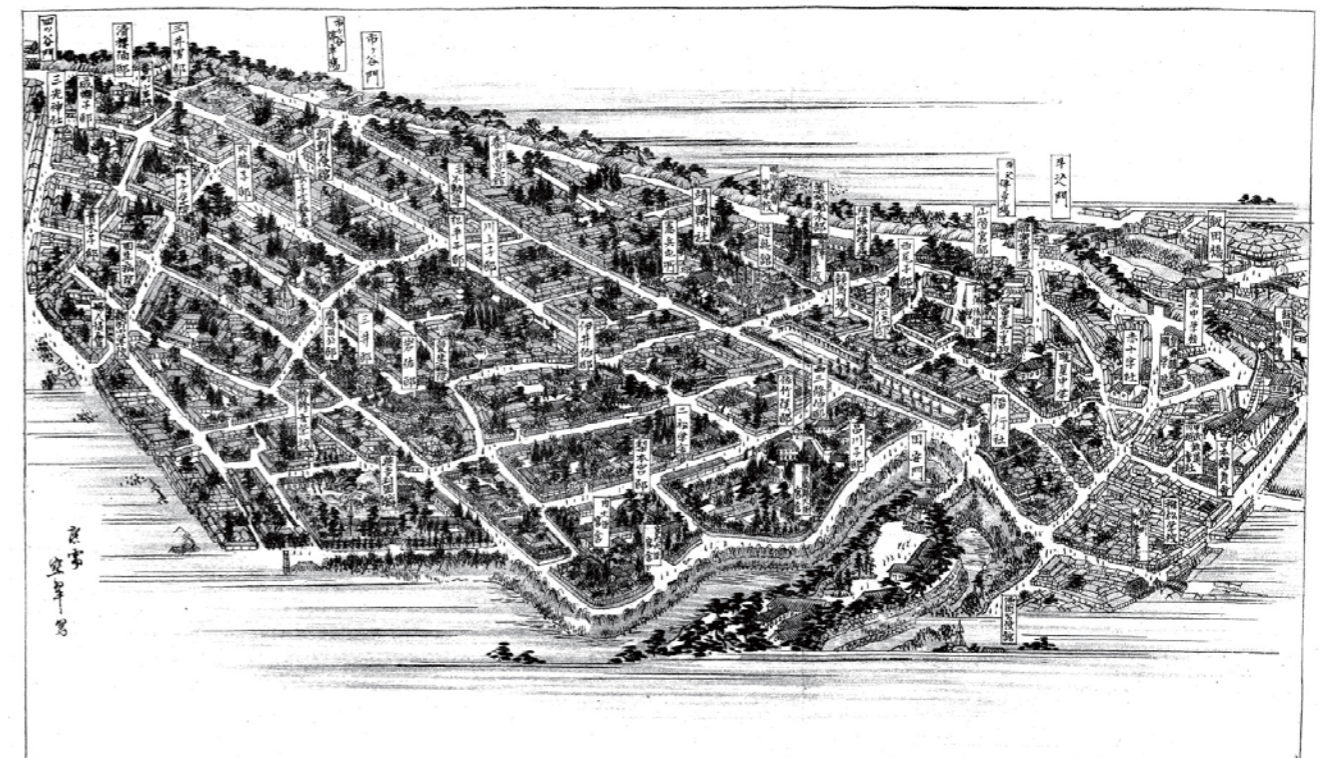


3. 北島馬「江戸八景」のうち「兩國夕照」(19世紀初め頃刊) 研究員個人蔵
中国の瀟湘八景になぞらえて江戸名所を描いたシリーズより。左下に描かれるのが多く人で賑わう兩國橋で、隅田川の川面には遊山船が多く見える。
4. 昇斎一景「東京名所三十六戯撰」(1882年刊)より「日本橋」江戸東京研究センター蔵
日本橋という旧来の江戸名所に、人力車や洋装の人物を取り合わせた戯画。
5. 『風俗画報』臨時増刊の『新撰東京名所図会』第19編(1899年刊)より「麹町区総図其三」(石塚空翠画)江戸東京研究センター蔵
九段坂を中心に、内濠と外濠の間を俯瞰的に捉えた図。本学の前身、和仏法律学校が見える。
3. "Evening Glow at Ryogoku" from the series Eight Views of Edo by Hokuga (early 19th century). Researcher's Private Collection
From a series depicting famous places in Edo in imitation of the Chinese Eight Views of Xiaoxiang. Illustrated bottom left is Ryogoku Bridge alive with people, and many pleasure boats floating on the Sumidagawa River.
4. "Nihonbashi Bridge" from "Tokyo Meisho Sanjuroku Gisen" (1882; by Shosai Ikkei). Research Center for Edo-Tokyo Studies Collection
Caricature of people in Western clothing and rickshaws combined with the long-established famous place of Edo, Nihonbashi Bridge.
5. "Kojimachi-ku Sozu Sono 3" (by Ishizuka Kusui) from *Shinsen Tokyo Meisho Zue 19* (1899): special issue of *Fuzoku Gaho*. Research Center for Edo-Tokyo Studies Collection
Bird's eye view of the area between the inner and outer moats, centering on Kudanzaka. We can see Wafutsu Horitsu Gakko, predecessor of Hosei University.
©YUMANI SHOBO, Publishers Inc



4

5



3

Project 3
テクノロジーとアート
Technology and Art

東京が達成しているものの具体例の枚挙と代表例の選定
Tokyo's achievements: listing real examples and deciding representative examples

法政大学文学部教授、プロジェクトリーダー 安孫子 信
Professor, Hosei University Faculty of Letters, Project Leader Abiko Shin

人間が自らを取り囲むモノや自然に、実用を目的に働きかける手段が技術であり、その技術の延長線上で、土器にそれとしては無用な縄目を付けるように、実用を超えて働きかけるに至った際に生み出されるのが芸術である。アートの一語はこうして広く、技術と芸術を指し示すことになる。都市はこのようなアートの産物であり、特に近代以降、西洋においては、モノや自然に徹底して数量化や合理化をもって臨む近代科学技術の主導の下に近代都市が生みだされていった。そして、近代都市で栄えた芸術も大きくはその流れに沿ってのものであったといえる(キュビズム、未来派、アブストラクト、構成主義、機能主義)。それは空間においては、それぞれの部分がかちがたく結び付いている有機的な全体、つまり自然を排除し、時間においては、前もっての計画には決して明示的に織り込みえない記憶、つまり歴史を忌避する。これは質を退けることを意味する。このような近代に対して折々に批判として繰り出されていった超近代(ポストモダン、脱構築)も、自然や歴史をアナクロニックに復旧させる愚(それはたしかに愚行だが)を避けることに忙殺され、自然や歴史を前進と生成のうちで回復させるまでには至らなかった。さてこれが西洋近代のアートのあり様だとして、同じ

Humans surround themselves with objects and nature. The step of making these work for practical usage is technology; an extension of this technology born when it is made to work transcending any practical application, like the rope markings – of no practical use themselves – on pottery, is art. The term art can be used widely to indicate technology and the arts. Cities are the birthplace of this type of art. In particular, since the modern era, modern cities have sprung up in the West under the lead of modern scientific technology and its encounter with thorough quantification and rationalization of objects and nature. The art that has flourished in modern cities can also be described as part of that flow (Cubism, Futurism, Abstract, Structuralism, Functionalism). Concerning space, this is an organic whole where the various pieces are put together inseparably; that is, it excludes nature. Concerning time, a memory that is never evidently incorporated into forward-looking planning; that is, it shuns history. In other words, quality is removed. Although sometimes delivered as criticism of this kind of modernism, Ultra-modernism (Post Modernism, Deconstructionism) too is preoccupied with avoiding the absurdity of restoring nature and history anachronically (which is indeed absurd), but does not succeed in reviving nature and history within its advances and generation.



『受容と抵抗—西洋科学の生命観と日本—』「国際日本学研究会叢書」22、法政大学国際日本学研究所(2015)の表紙。右は本書の元である、同タイトルで行われた国際シンポジウム(法政大学、2014年)の様子。
Cover from *La réception et la résistance : la vie selon les sciences occidentales et le Japon* "Kokusai Nihongaku Kenkyu Soshu" 22, Hosei University Research Center for Japanese Studies (2015) Right: Scene from the international symposium of the same title which gave rise to the book (Hosei University 2014)



西洋のartを、明治以降、東京はきわめて忠実に学び導入していったのである。しかし自ら意図したことではなくて、おそらくは、いわば持ち前のレジリエンス(回復力)によって、東京は、その西洋のartを撓め、西洋のartと独特の — 他に例を見ない — 共存を果たして今日に至ってきたと考えられるのである。そのartとの関係での東京のユニークさを、歴史的な、また今日の、多々の事例のなかで検証し確認していくことが本研究の目的である。さしあたってのことでは、ロンドンにロンドンウムはもはや存在しないとして、東京は江戸東京であって、単に東京なのではない。すなわち、歴史が忌避されていない。また、世界の大都市がほぼ土農工商のうちの土商だけからなるところ、東京は本質的に水都のため土農工商が今日でも共存している。すなわち、自然が排除されていない。しかもこのような歴史や自然は、後ろ向きにアナクロニクに留まっているのではなく、それらは生成変化(メタボリズム)のうちで息づいている。歴史や自然は、博物館や記念公園ではなく、東京の最も新しい街並みにこそ見出されるのである。そして、そのメタボリズムを支えているのがartである。それはもはや文字通りに西洋のartなのではなく、他に類を見ない東京のartなのである。その東京のartの全体像に迫ることが本研究の目的となる。

This is how modern Western art stands. That same Western art was studied and introduced extremely faithfully to Tokyo from Meiji onwards. Without being a deliberate intention, however, but due to a natural resilience, Tokyo trained Western art so as to achieve a unique coexistence between it and its own that is unseen elsewhere, and that continues today. Investigating and confirming Tokyo's uniqueness in relation to its art, both historically and within the numerous examples today, is the aim of research here. As a comparison we might say that while Londinium no longer exists as part of London, Tokyo is Edo-Tokyo and not simply Tokyo. History has not been forgotten. Most of the great cities of the world have consisted only of warrior and merchant classes from the "warrior, farmer, artisan, merchant" hierarchy, yet Tokyo is essentially a water city, where even today "warriors, farmers, artisans and merchants" coexist. Nature has not been excluded. This nature and history, however, is not backward-looking and anachronically stopped in time, but breathes within generation and change (the "metabolism"). History and nature does not point to museums and memorial parks, but can actually be discovered in the newest of Tokyo streets. Art is what supports the metabolism. Not Western art per se, but "Tokyo art" of a type not found anywhere else. The aim of this research is to close in upon the complete image of Tokyo art.



安孫子 信 Abiko Shin

1951年生まれ。専門は哲学、フランス思想史。京都大学大学院修了。主な編著書に『Mécanique et mystique』OLMS (2018)、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』書肆心水(2016)、『Bergson, le Japon, la catastrophe』PUF(2013)、『デカルトをめぐる論戦』京都大学出版会(2013)などがある。

Born in 1951. Specializes in philosophy, and history of French thought. Graduated Kyoto University Graduate School. Editor and author of works including *Mécanique et mystique*, 2018, OLMS, *Bergson Busshitsu to Kioku o Kaibou suru*, 2016, Shoshi Shinsui, *Bergson, le Japon, la catastrophe*, 2013, PUF, *Descartes wo Meguru Ronsen*, 2013, Kyoto University Press.



サムエル・カクゾロフスキー氏(トゥールーズ第2大学)による講演会「第二次大戦後の日本アニメー手塚治虫の足跡」(法政大学国際日本学研究所、2010年)のポスター。イラストは講演者自身による。左の写真は、講演時の様子。

Poster for lecture by Samuel Kaczorowski (Researcher, University of Toulouse - Jean Jaurès) "L'animation japonaise après la Seconde Guerre mondiale - l'empreinte d'Osamu Tezuka" (Hosei University Research Center for Japanese Studies 2010). Left: Scene from the lecture.

「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ④ 「〈日本意識〉の三角測量ー未来へ」

サムエル・カクゾロフスキー氏
法政大学国際日本学研究所客員研究員・トゥールーズ第2大学博士課程

第二次大戦後の日本アニメ 手塚治虫の足跡

司会：安孫子信
法政大学国際日本学
研究所所長、教授



2010年7月24日
(土) 15:00-17:00

法政大学市ヶ谷キャンパス
国際日本学研究所
セミナー室(58年館2階)

第二次大戦後の日本アニメの再出発は、ディズニーの長編アニメとUPA(アメリカ・ユナイテッド・プロダクション)が手がけたテレビ・アニメという、アメリカ・アニメの二つの巨大な影響下で始まった。東映動画が長編アニメでディズニーに対抗しようとしたのに対して、手塚が虫プロを創設して目指したのは、テレビ・アニメの領域であった。手塚はテレビ・アニメに固有な技術的条件(制約)をむしろ逆手に取る形で、様々な手法的革新を行い、世界に比類のない日本アニメを造り上げていったのである。アニメ史に残る手塚の仕事の意味を、とくに戦後初期彼の活躍に絞って見ていきたい。

講演はフランス語で行われますが、通訳がつかず※標題に「7月24日 特別研究会参加希望」とご記入の上、氏名、所・住所、電話番号を本文にご明記ください。参加可否の連絡は、お送りしましたE-mail アドレス宛にご返信致します。(お送り頂きました個人情報は、本目的以外には使用致しません。)

連絡先: 法政大学国際日本学研究所センター事務室
〒102-0073 東京都千代田区九 3-2-3 九段校舎別館1階
Tel: 03-3264-9682 Fax: 03-3264-9884
E-mail: nihon@hosei.ac.jp; http://aterui.hosei.ac.jp/



4

Project 4 都市東京の近未来 Future City Laboratory Tokyo

次世代都市研究拠点との連携、都市問題の確認、東京近未来研究の位置づけ
Cooperation with base for research in next-generational cities, confirmation of urban issues, establishment of Tokyo's Near Future Research

法政大学デザイン工学部教授、建築家、プロジェクトリーダー 北山 恒
Professor, Hosei University Faculty of Engineering and Design, Architect, Project Leader Kitayama Koh

〈現代都市〉は19世紀末北米で生み出され、大量生産・大量消費を基調とする資本主義社会システムとともに、瞬く間に全世界に普及した都市類型である。経済活動を中心に組み立てられているため、その都市構造は人間の本来的な生活やコミュニティのためには必ずしも適合していない。そのなかで、東京という都市はこの〈現代都市〉という都市類型に対応しながらも、江戸からつながる文化的地理的基層をもつために、世界のなかでもユニークな都市形成を行った都市である。本研究プロジェクトは、人間の集合形式や共同体のあり方など都市の原論的研究、都市社会学、政治経済による地域マネジメントに関わる研究、都市環境学や都市基盤学、都市防災などの科学技術的研究など、江戸東京という巨視的な視座をもつ多面的な都市研究の成果として、西欧で発達した〈現代都市〉を乗り越える新しい都市の姿を策定するものである。

21世紀半ばには、世界の過半の人口が都市に居住することになるが、江戸からつながる西欧文明以外の社会思想を背景とした東京という都市の研究は、次世代の世界の都市のあり方に選択肢を与えるものである。経済活動を中心とした現代都市のなかでは、機能効率を求めて

The “modern city” was born in North America at the end of the 19th century. The city type spread around the world in no time, along with the capitalist-system society based on mass production and mass consumption. Built centering on economic activity, the city structure is not necessarily suited to traditional human living and community. One example, the city of Tokyo, although fitting the “modern city” type, has cultural and geographical foundations remaining from Edo which makes it a city with urban formation that is unique throughout the world. As a result of research of the principles of the city: human collective form and community etc., research relating to urban sociology and regional management based on politics and economics, multi-faceted urban research such as urban environmental studies, urban infrastructure studies, and scientific and technological research for urban disaster prevention etc., this research project will use the macroscopic viewpoint of Edo-Tokyo to draw up an image of a new city that transcends the “modern city” developed in the West.

By the mid-21st century, over half of the world's population will be living in cities, but research of the city of Tokyo which has a sociological background other than Enlightenment from the West – its ties with Edo – will offer a choice in ways of living for world cities of the next generation. Within modern cities centering on



1. 図版(粒状ヴォイド)
粒状のヴォイドは、空き家・空き地が生まれやすい東京の都市構造を表現している。この粒状の都市要素は明滅するように変化する。
2. 図版(線形ヴォイド)
線形ヴォイドは、地形地理と密接に関係しており、人が往来する商店街や道路、自然地形である水路やその暗渠、崖線緑地などの線形を読み取ることができる。この線形ヴォイドは生活に近接して存在するため、コミュニティと深く関係している。
3. 図版(面的ヴォイド)
面的ヴォイドとは、江戸の武家屋敷が公的な施設(公園、学校や官庁など)に変換したものと、寺社地境内として江戸時代から継続するもので、江戸期から数百年続く大きな空地が読み取れる。
1. Plate (Granular Void)
Granular voids describe Tokyo's urban structure where empty housing and spaces easily come about. These granular urban elements change rapidly.
2. Plate (Linear Void)
Linear voids are closely related to geographical features, and from them we can detect shopping streets and roads frequented by people, waterways of the natural landscape and their covered conduits, and cliff-edge green tracts. As these linear voids exist in close proximity to everyday life, they have deep ties with community.
3. Plate (Areal Void)
Areal voids are the wide open areas that have survived the several hundred years since Edo, where Edo samurai residences have been transformed into public amenities (parks, schools, government buildings etc.), and where temple and shrine grounds have remained since the Edo period.

空間は分断され、共同性は薄れ、人々は孤立化している。近代以前、豊かに存在していた共有地(コモンズ)は自然と共生し、人々の生活を支える重要な空間であった。このような問題設定に対し、人間の生活圏をサポートする地域タイポロジー(コモンズを生成する都市の部品)の研究およびその社会実装の策定を行う。それは、江戸からつながる社会資源を継承して自助的な居住都市をつくる研究プロジェクトになる。

これまでの都市構想は、すべて都市を管理する側が措定するものであった。ここでは新しい情報技術(ICT)を用いることで、都市を利用する側から、これからあるべき近未来の都市東京の姿を策定していく。精度の高いデータアナリシスが可能となる情報技術を用いて、民主的都市をつくる研究プロジェクトとなる。それは、これまでの大企業中心の産学共同研究とはまったく異なったスケール(細かなグレイン)でなされる、別次元の産学共同研究を同時多発的に発生させる。大規模再開発でなく、もっと人間的なスケールで「都市の自助」を促す、新しい都市再生の手法を発見するものである。

economic activity, space is fragmented in the search for functional efficiency, sense of community is weak, and people have been isolated. Before the modern age, commons (common land) that had always existed in abundance were a means to living alongside nature, and an important space for supporting people's lives. From this posed problem, we conduct research in regional typology that supports the human biosphere (part of the city generating commons) and decide its social implementation. This research project will build a self-reliant residential city by inheriting social resources from Edo.

City planning to date has assumed the side of city administration. Here, by employing new information technology, we will attempt to draw up an image of how the city of Tokyo should appear in the near future from the side of city utilization. Using highly accurate data analysis made possible by information technology means it is a research project building a democratic city. Multiple and simultaneous joint research between industry and universities will occur on a completely different scale (fine grain) and in a different dimension to the big business-centric joint research to date. Rather than large-scale redevelopment, we will discover methods for new urban regeneration that encourage more human-scale "urban self-reliance".



4

Photo by architecture WORKSHOP



北山 恒 Kitayama Koh

1950年生まれ。建築家、専門は都市理論。横浜国立大学大学院修了。代表作「洗足の連結住棟」「祐天寺の連結住棟」で日本建築学会賞、作品選奨受賞など。著書に『都市のエージェントはだれなのか』TOTO出版(2015)、『モダニズムの臨界』NTT出版(2017)、共著に『TOKYO METABOLIZING』TOTO出版(2010)などがある。

Born in 1950. Architect, specializes in urban theory. Graduated Yokohama National University Graduate School. For "Senzoku Apartments" and "Yutenji Apartments" awarded the Prize of AIJ 2010, Architectural Design Division and Annual Architectural Design Commendation of AIJ etc. Author of *Toshi no Agent wa Dare nanoka*, 2015, TOTO Publishing, *Modernism no Rinkai*, 2017, NTT Publishing, co-author of *TOKYO METABOLIZING*, 2010, TOTO Publishing, etc.

5

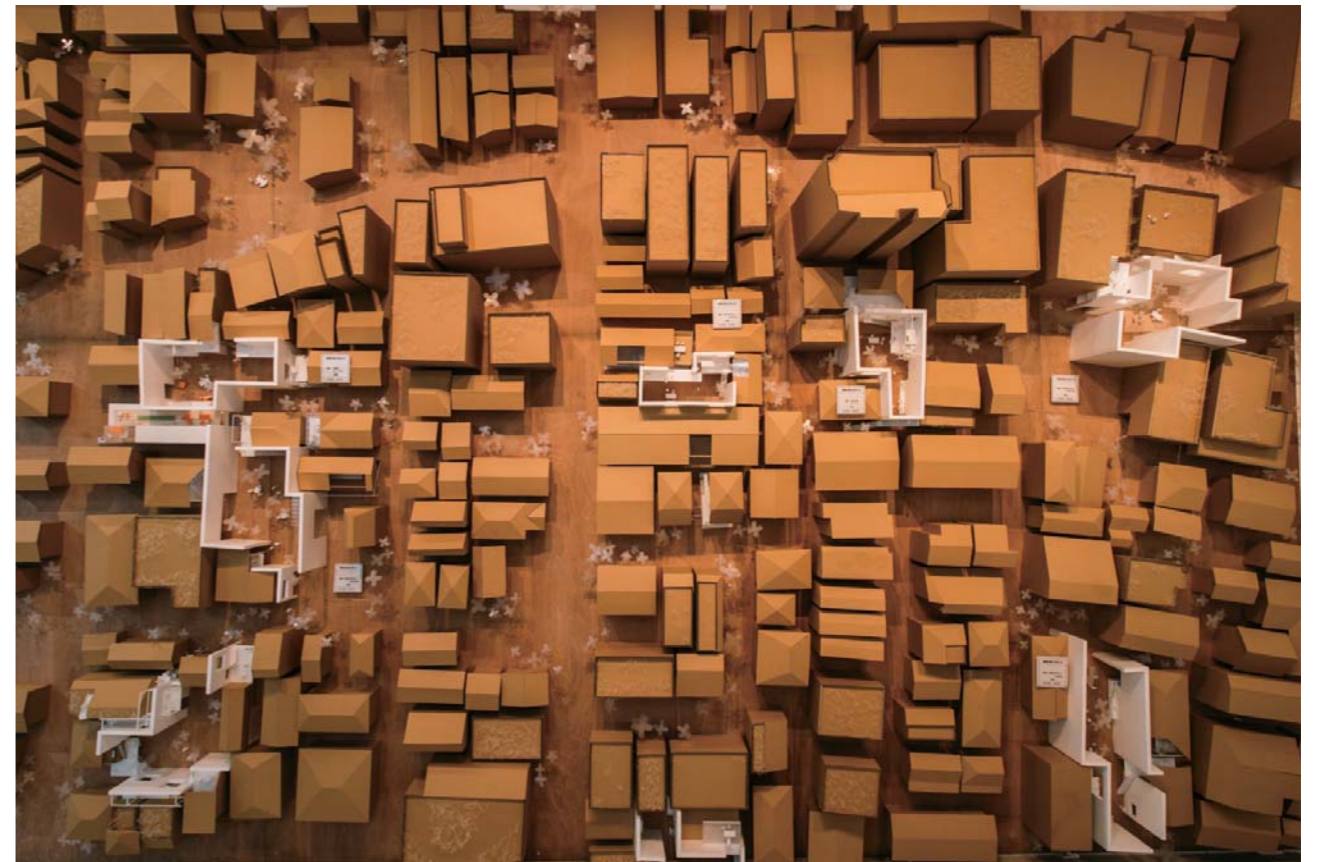


Photo by YUKAI

6

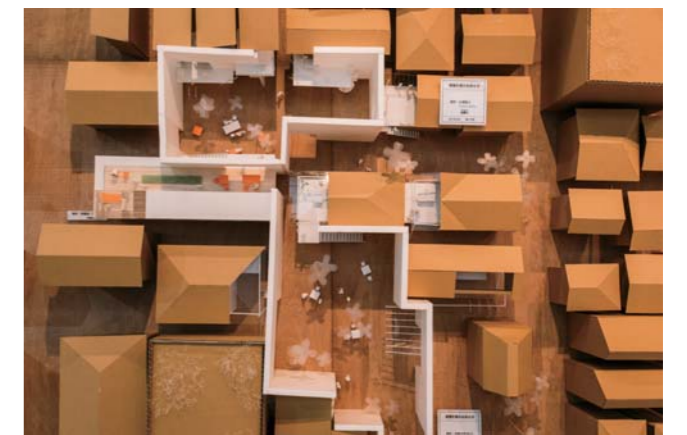


Photo by YUKAI

7



Photo by YUKAI

4. 第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示「TOKYO METABOLIZING」コミッショナー北山恒(2010年)。絶え間なく生成変化を続ける粒状の都市組織の研究。

5-7. 木造密集市街地では街区の奥に未接道宅地があって、そこに「空き地空き家」が生まれやすい。都市の中にある最も脆弱な部分こそ、都市の未来をつくる「資源」であるという考えを展示している。

4. 12th Venice Architecture Biennale Japan Pavilion Exhibition "TOKYO METABOLIZING" Commissioner Kitayama Koh (2010) Field of Autonomous, self-regenerating grain.

5-7. Inside the blocks in districts of densely-packed wooden buildings there is housing with no road access, and empty houses and spaces come about easily. We suggest that it is these most fragile parts within the city that are the "resources" that will build the city's future.

法政大学ブランディング事業シンポジウム
 「江戸東京の基層／古代・中世の原風景を再考する」
 開催日:2018年1月20日
 場所:法政大学市ヶ谷キャンパス

Hosei University Branding Project Symposium
 “The Structure of Edo-Tokyo:
 Reviewing the Original Ancient and Medieval Landscape”
 Held: January 20, 2018
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus

江戸東京の基層

古代・中世の
原風景を
再考する

日時:2018年1月20日(土)13:30~17:30
 会場:法政大学 富士見ゲート棟 G403教室 (市ヶ谷キャンパス)
 主催:法政大学 江戸東京研究センター

プログラム

13:30 主催者挨拶: 陣内秀信 (法政大学 江戸東京研究センター)
 14:00 基調講演1: 「水都府中の成立と東山道楽」
 神谷 博 (法政大学 建築学系)
 14:30 基調講演2: 「家屋以前の江戸—東京盆地の古代・中世の地形—」
 山口 繁 (法政大学 建築学系)
 15:15 基調講演3: 「古代・中世の聖地を取り込む江戸の都市開発」
 高村雅彦 (法政大学)

16:00 休憩
 16:10 「パネルディスカッション: 「江戸に集まる古代・中世の原風景」
 司会進行: 森田明彦 (法政大学 建築学系)
 コーディネーター: 陣内秀信
 小口隆史 (法政大学 建築学系)
 小野一之 (法政大学 建築学系)
 神谷博・山口繁・高村雅彦

17:25 閉会挨拶
 17:30 閉会
 18:00 懇親会

お問い合わせ: 法政大学 サステナビリティ・実践知研究推進事務局
 03-5228-1267 (代表) | tsnp@hosei.ac.jp

本シンポジウムの目的は、東京の歴史を近世の江戸から長く遡る「江戸東京学」を興り、江戸の町下層階級以前の古代・中世からすでに存在し、今の東京のユニークさの源泉となっているこの都市／地域の基層に光を当て、その構造を明らかにすることにある。対象エリアも自ずと、江戸の市域を大きく引き、東の東京盆地、西の武蔵野、多摩へと広がる。法政大学エコ地域デザイン研究センターが長年取り組んできた水と研究の成果を踏まえつつ、この都市／地域の地形・地質・水系、その上に形成された古代・中世の街道（古道）、砦・寺・屋敷・堀・集落・居住地、道、市街地などに注目し、世界のなかでも独特の性格をもつ巨大都市東京の成り立ちを多角的な観点から解剖していきたい。



現代の東京のユニークさの源泉となっている、地形や水系、古道、国府といった基層に光を当て、世界のなかでも独特の性格をもつ巨大都市東京の成り立ちを、古代・中世まで遡って再検討することが試みられた。多角的な視点から議論が行われ、新たな江戸東京学への手応えと、大きな足掛かりを得ることができた。

We shed light on the source of the uniqueness of present-day Tokyo: the structure of land forms and water systems, ancient ways and local seats of government. We attempted a reexamination of the emergence of the megalopolis of Tokyo that has its own character in the world, by looking back to ancient and medieval times. Discussion developed from many different viewpoints; we gained responses to the new Edo-Tokyo Studies, including some invaluable clues.

「続・Tokyo Metabolizing展」+ シンポジウム

開催日:2018年2月18日~3月4日
 場所: EARTH+GALLERY

“Sequel: TOKYO METABOLIZING Exhibition”

Held: February 18 – March 4, 2018
 Venue: EARTH+GALLERY

続・Tokyo Metabolizing展
 +シンポジウム

2/18 Sun. 14:30-18:00
 法政大学 FCLT (Future City Laboratory Tokyo) シンポジウム
 都市東京の近未来

2/25 Sun. 13:00-16:00
 東京工業大学 本研究室 ワークショップ
 未来の住宅を
 考える

3/3 Sat. 14:00-18:00
 横浜国立大学 先端科学高等研究院 シンポジウム
 Creative Neighborhoods 4
 Big Form, Small Grain
 「集まって住む」ための
 個と全体のかたち

陣内秀信
 塚本由晴
 北山恒
 寺田真理子
 横山泰子
 安孫子信
 高村雅彦

中村真広
 連勇太郎
 山道拓人
 乾久美子
 ライナー・ヘル
 藤原明理
 高村学人
 長谷川逸子
 藤原聡子

2018
 2/18 Sun. - 3/4 Sun.
 11:00-19:00

EARTH+GALLERY
<https://edotokyo.hosei.ac.jp>



Photo by YUKAI



都市東京の近未来の研究テーマのひとつ、絶え間なく生成変化を続ける粒状の都市組織を対象とした研究の展示を行った。生成変化し続ける粒状の都市要素で埋め尽くされる東京の木造密集市街地にこそ、この都市の未来をつくる可能性があるとするものである。継続するその研究内容を法政大学の主催のもと東京工業大学、横浜国立大学と共同で展示発表した。

We held a display of our research focused on the granular urban tissue that continues to metabolize unceasingly, which is one of the research themes of Future City Laboratory Tokyo. We believe that it is Tokyo's districts of densely packed wooden buildings – buried in the granular urban elements continuously metabolizing – that have the potential to build the city's future. We presented a display of content to follow up this research in collaboration with the Tokyo Institute of Technology and Yokohama National University.

EToS 江戸東京研究センター 設立記念国際シンポジウム
「新・江戸東京研究—近代を相対化する都市の未来—」

開催日: 2018年2月25日
場所: 法政大学市ヶ谷キャンパス

EToS Research Center for Edo-Tokyo Studies: Symposium to Mark its Inauguration
“New Edo-Tokyo Research:
Relativizing Modernity for Redefining the Future of Cities”

Held: February 25, 2018
Venue: Hosei University Ichigaya Campus



Photo by Haruka Kuryu

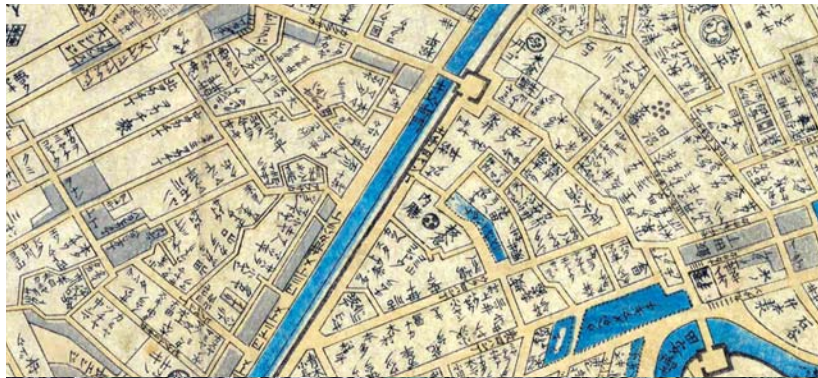
初代センター長の陣内秀信氏からセンターが目指すビジョンが説明されたのち、建築家の横文彦氏と文化人類学者の川田順造氏による基調講演が行われた。その後、国内外の多彩な分野の専門家によって、従来の「江戸東京学」を乗り越える論点が示され、江戸東京研究センターの船出にふさわしいシンポジウムとなった。

Following an explanation from the first Center Director, Jinnai Hidenobu, of the vision the Center will aspire to, keynote presentations were given by architect, Maki Fumihiko and cultural anthropologist, Kawada Junzo. Next, arguments were put forward by specialists from Japan and overseas in various fields in favor of transcending former “Edo-Tokyo Studies”. The symposium thus proved a fitting launch for the Research Center for Edo-Tokyo Studies.

EToS 法政大学
江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

法政大学 江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies
<https://edotokyo.hosei.ac.jp>
問い合わせ先: 法政大学 江戸東京研究センター事務局
E-mail edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp TEL 03-3264-9682

発行: 2018年3月31日



〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
2-17-1 Fujimi Chiyoda-ku Tokyo, JAPAN